

## 一世紀を生きつゝ



東京の井の頭公園のそばに住んでいたころはよく、彫刻園をたずねて北村西望さんの作品をながめた。『將軍の孫』という彫刻がある。幼い子が、だぶだぶの軍人の長靴をはいて相手の礼のような格好をしている。そのあどけない顔と相対しているだけで落ち着いた気分になる。しばらくたつとこの「孫」の顔がみたくなくてでかけたものだ。

ことし百歳を迎える西望さんは「たゆまざる歩みおそろしかたつむり、という言葉が大好きだ」と書いている。かたつむりの歩みに自分の足跡を重ねあわせているのだろう。

長寿のお祝いのために訪問した鈴木都知事に「一世紀を生きて何が一番うれしかったですか」とたずねられ、翁は答えている。「文展ではじめて二等に入賞したことです」。

これにはわけがある。若いころの仲間に、朝倉文夫や建畠大夢がいた。二人とも天才的な彫刻家で、はやくから文展に入賞していた。西望は来る年も来る年も入賞できない。落選するこ

とさえあった。夜も眠れず、ふとんをかぶって泣いた。ノミを捨てて郷里へ帰ろうかとさえ思った。

だが「絶望の淵からはい上がる思い」で出品した作品が二等賞になった。翁はその時「自分は天才ではないのだから、人が五年でやる事を、十年かけてでもやらねば、と心中深く思った」そうだ。

いまも肌につやがある。生野菜をよく食べ、毎日少量の酢を飲む。あせらず、こだわらず、くよくよせず、争いやけんかなんか、こっちから先に負けてきれいに忘れ、冬もあり春もありて人生また楽しい心で暮らす、これが長生きのこつらしい。

長崎の『平和祈念像』は七十二歳の時に完成した渾身の作だ。「馬齢を重ねながら少しも上手になつたような気がしない。やはり心がけができればだめらしい。まだ三十年や四十年はがんばらなければ」。七年前の言葉だが、恐れ入りました、と頭を下げるほかはない。